

美しい国づくりの基本は、自らが暮らす街に愛着を持つことだろう。「持続可能性＝サステイナビリティ」を基軸として、環境、社会、経済、精神文化が調和した新しいまちづくりにより、サステイナブルコミュニティの実現をサポートする特定非営利活動法人サステイナブル・コミュニティ研究所の川村健一所長にこれからのまちづくりの方向を聞いた。



特定非営利活動法人  
サステイナブルコミュニティ  
研究所代表理事所長  
川村健一氏

## 風景の創出は人と人との繋がり

# 人工物に“命”、手を入れ世代超え育てる

サステイナブル・コミュニティというと、美しい街や街並みを想像されると思いますが、そこに暮らす人、その人の心や生き様というものが大事になってきます。人は一人では生きていけず、助け合いが必要です。人と人の繋がりを育てていくプロセスがコミュニティを育て、サステイナブルなコミュニティを形成していきます。ただ、それに完成品はなく、常につくり続けていくことで繋がりの関係を育てていくものです。そうしたことが基本になって美しい街や美しい風景になっていくのではないのでしょうか。コミュニティが成立するためには互いに理解できる社会、循環する経済、そして環境的なことを考える必要があります、それが地域の充実につながっていきます。

環境に順応していく動物のもっている本能をアホーダンスといい、人間も持っています。環境に対して頭で考えるより前にその本能が働き順応していきます。そういう部分が美しいもの、あるいは懐かしいというものに対して人は「ほっ」とします。環境と人間とのそのような関係の中で環境に対する心が生まれ、人と人が繋がっていきます。

環境でもう一つ大事なことは人工物でないことです。例えば道路やコンクリートで固めた水路などは人間が自分達の機能を確立させるため、さらにその機能をメンテナンスフリーにさせるためにつくったものであり、都市はそうしたものです。人間がコントロールし、そうした人工物の機能が悪くなれば壊してし

まう。ところが、自然はコントロール出来ない。人間のほうが共生していかなければならない。自然には命があり、それと一緒に生きていく関係がサステイナブルの基本です。

しかし、人工物にも命を与えることが出来ます。人工物の周囲も含めて、その場所にしかない（より自然に近い）新しいものにつくり変え、かつ手を入れて磨いていくことです。例えばコンクリート三面張りの水路を人が水辺で遊び、生き物が生息できるものにつくり変えていくこと。人工物に命を与える、あるいはその場所なりのアイデンティティを与え、その後も手を入れ、メンテナンスを続けていく。それがサステイナブルということであり、コミュニティと同じように完成品はなく、永遠に手を入れて育てていくことです。

現在の人間社会をみると、同世代のネットワークに繋がりはあるが、世代を超えた縦の繋がりはとても希薄になっている。コミュニティのなかで、ある場所や人工物に手を入れ、育てていくことは世代を超えた人と人との繋がりをつくり、思いを伝えていくことになる。そうした思いが世代を超えた共有の資産、つまりコモンズをつくっていく。

公共事業も例えば道路を建設して終わりではなく、コモンズをつくっていかなければならない。それによって街の一つの景観がつけられる。それがこれからの新しい日本の環境をつくり、環境と人間の間をつくっていく。

(日刊建設通信新聞2004年11月12日)